

「大龍」について ①

『天理教教典』「第三章 元の理」には、「この世の元の神・実の神は、月日親神であつて、月様を、くにとこたちのみこと日様を、をもたりのみことと称える。あとなるは皆、雛型であり、道具である。更に申せば、親神は、深い思召の上から、その十全の守護を解りやすく詳しく示し、その夫々に神名をつけられたのである」とある。

そもそも「十柱」の神様のうち、いざなぎのみことといざなみのみことの「二柱」は夫婦の「雛型」として、月よみのみこと、くにさづちのみこと、をふとのべのみこと、くもよみのみこと、かしくねのみこと、たいしょく天のみことの「六柱」は、人間のからだの働きにおいて重要な「道具」の役割を担うとされている。そして、「陽気ぐらし」世界実現のために「雛型」となるべく引き寄せられた「二柱」の神様は、うを(サンショウウオ)とみ(スナヤツメ)であり、日々生活するさいに必要な「道具」として呼び寄せられた「六柱」は、しゃちほこ(マツカサウオ)、かめ、黒ぐつな、うなぎ、かれい、ふぐである。これら8種類の動物とも姿形は比較的想い描きやすく、具体的で身近な生き物たちである。

ところが、残りの「二柱」の神様、すなわちくにとこたちのみこととをもたりのみことのお姿は大龍と大蛇とされているが、親神の直接的な現れを示すとされているにもかかわらず、お姿は想像上の動物として想い描くことしかできない。なぜ龍ではなく大龍なのか、なぜ蛇ではなく大蛇なのかについても、十分に考察する必要がある。それは、「守護の理」を深く理解するためには重要なことだと考えるからである。

「元初まりの話」に登場する水域棲動物は、確かに実在する動物だけではないが、それでも幕末から明治にかけて生活していた一般庶民たちには、ふつうに理解できたはずである。

そこで、本稿では当時の一般庶民に認識され、想い描くことができたであろう「龍」の姿形について考えたい。

中山正善二代真柱が著した『こぶきの研究』には、いわゆる「古記本」の一つ「榊井本・五」が紹介されている。この「榊井本」には、「くにとこたちの命わ、天にてわ月様なり。この神わ男神にして、おんすがたわ、かしらぎつ、おふわひとすじののたいりやうなり」とある。また、諸井政一著『改訂正文遺韻』(2014年版)には、「月様の御姿を龍といふは、是は理の世(りのよふ)やという事を、あらはしてあると聞せられます」とある。

これらのことから、月様のお姿である「大龍」は、頭部が一つで胴から尾にかけては一筋になっている大型の龍、と想い描くことができる。

天理市滝本町に落差23mの「桃尾の滝」(写真1)がある。この滝は、後嵯峨天皇や僧正遍照が「古今和歌集」の中で「布留の滝」と詠んだほど有名な滝である。この滝は、桃尾山蓮華王院龍福寺の境内地にあり、石上神宮の元宮だったとも伝えられている。ところが、この龍福寺は明治の廃仏毀釈で廃寺となったが、それでも大正7年には龍福寺の阿弥陀堂跡地に不動堂が建立され、大和桃尾山大親寺と号して今日に至っている。ちなみにこの大親寺の祠は桃尾山(別名、国見山)の山頂にあり、今でもここから大和盆地を眺望することができる。

龍福寺は、奈良時代に法相宗の祖・義淵僧正が建立した「龍」の名のつく三つのお寺の一つで、行基がここに16坊の大伽藍を完成させたことでも有名である。ほかの二つは、明日香村の龍蓋寺(岡寺)と吉野町の龍門寺である。ちなみに、龍門寺は龍門山(竜門岳)南斜面にできた「竜門の滝」の上に建立され、龍蓋寺は龍蓋池に封じた龍の説話に由来するという。



写真1. 龍福寺跡近くにある桃尾の滝。

昔から天理周辺では、東山中の龍福寺は龍王の頭で、東山の峰々を蛇行して三輪山に至る部分はその尾、と伝えられている。そして途中の龍王山は背中に該当するという。これは、大和盆地東側の青垣の山々には巨大な「龍王」が鎮座し、時には山中に籠っていたかもしれない。この「龍王」こそ「大龍」ではないかと考える。まさに、東に鎮座する「四神」の中の「青龍」と考えることもできる。

とくに、奈良県には「龍」「滝」を使った名称が多いようである。龍福寺、龍蓋寺、龍門寺のいわゆる大和三龍寺のほか、龍王山の中腹に鎮座する田町龍王社(写真2)



写真2. 龍王山中腹に鎮座する「田町龍王社」。

などの神社、滝本町や長滝町などの地名、大和神社でおこなわれる「ちゃんちゃん祭」に奉納される「龍の口舞」などが挙げられる。

「竜頭りゅうず」という言葉がある。「物事が成り立つための最も重要な部分を意味する。天理教においては、「天理教を統べ理(おさ)める」真柱や教会長など、教団や教会における信仰のかなめの役割を果たす人」(『天理教事典第三版』)をさす。

私たちは「信仰のかなめの役割を果たす」竜頭の気持ちを共有しながら、「陽気ぐらし」世界実現に向けた実動を、勇み勇ませながら続けていくことが大切ではないかと考える。